



葛村遺稿

全



吳春寫
錢之真



江山一色は瀟灑と痕暗の
高麗禪箱おのりて
又此大方子周り七
年謝せぬ村

盟家の子孫に幸由相去

蕪村送行

春之部

於早守ら仰りたわね
うらむすの村ぬれを
習わねとる米乃中
なれまはるる学
うらむすの村ぬれを
習わねとる米乃中
なれまはるる学
うらむすの村ぬれを
習わねとる米乃中
なれまはるる学

うらむすの端やあら向うは向
学や世中乃夢の竹百の干
種木所うらむす西へむきめ
うらむすいさし宗任ら物音り
うらむすや柏作をさあれ
嘗や梅ぬみふるそのの鹽
うらむすちち並の里の
端あつこうそむきわ山おし
つか宿のうらむすをさるん物
てい

泉とあらん学守らあしむら
一おあそらぬるな何梅の
塊とんら梅乃あしむ
やんしちと畠とあて梅見
水と散てつれあめあな梅
うらむすのちたあめわ梅の
世路の梅あもあめあら
風雪の吹ひおち梅の風
白梅やつそれつれも休た

みゆ梅や入日の鏡もや松のし
梅の香のさのちりそや月の暈
散るたむと老い梅の梢ふ
雪解や妹ら巨魁こそは
池田らら灰くれしまのさ
をらくとちあふらるる梅
やぬりの宿のねふらと
やお入や悠こめはく男山
頼父入と守れそ女の地を

暁月大はをのえる津丹
おちち舟陸こはらる水や
月おちち高妙の坊のお
不こおらし十三人乃ち
柳もやとらあゝあ葉柳下
甲冑の姫ら柳あけけ
風吹らぬおのそふい柳
おまをくら日のくれか
まゆのほはく一たりま

春風く阿着紫のらよの白り
小舟を伊都道にちまきの水
ふる水あるはあちまきの水
湖や望田つらと春乃水
里人こい鴉片くれまきの水
春乃水まきれはまきを
あらしゆく
小舟の娘女のせたまきの水
あられ来て池と戻るちまきの水
春雨や珠散り落したる瀟

春雨こぬれはちまきの水
池と川とまきの水
春雨や花佳の七日と
春雨や同車のまきの水
まきの水の中とまきの水
まきの水はまきの水
春雨と下流のまきの水
春雨と女と鹿乃骨のまきの水
春雨と蛙の腹にまたまきの水

春の雨にのめふことなほあり
釣鐘とよほつたむらさき
日くぬく春の昔のちもむか
まゝおわねの誘ふ上立里
等も染く香柱く春の夕夕
春の夕夕の須み強きまはり
松蔭て昨夕の雨をたふし
漸そく水や田圃のすそに
をるおわね宿もえええ
くちまほし

畑の片わた問人のんえええ
畑のお目とよほつたむらさき
をるおわねとよほつたむらさき
畑のお目とよほつたむらさき
茶臼とよほつたむらさき
向ふおわねとよほつたむらさき
おわねとよほつたむらさき
畑の片わた問人のんえええ
山崎やお丸とよほつたむらさき

出舟や替らば 掃ふせの
花と老ゆての 是あは
た片原の 是あは
雑竹や 是あは
う一帯や 是あは
阿の女乃 宿の
細子か 是あは
ぬた女 是あは
お魚の 是あは

イ女を 是あは
海菜や 是あは
柳の花 是あは
雑の竹 是あは
あはち 是あは
茶の元 是あは
たのを 是あは
茶の元 是あは
まの元 是あは

馬下りて高根の梅見ゆ
祇也鑑也花と香在ん
柏木乃ひらばあつふ
又よまよまよの花
梅らる苗代水や星
さぬ散て刺ある草
みま更と散か
むす規石山の梅
らる梅なるい

ちり花を後も花の
鳥帽子脱て糸と
永らるとい
まよまよの梅
さぬ散て刺ある草
みま更と散か
むす規石山の梅
らる梅なるい

うらやましく皆より人より慕われ
大明の日のや、靡ゆる春のくれ
花はゆらぐ棹の師匠のやとくれ
河ら向らぬた人ゆら花の
山と夕の南いらる春の九暮
春のくれ花のやの人とわれ
いとちるを力と恨るぬわれの
お佛とよらみは舞下いれぬ
かよくこまの思ふよのち花が

ゆら花の眼のよとあめね
はよおちるよと花をたけぬる
ゆら春のよと花のよと花の
ゆら花のよと花のよと花の
花をよと花のよと花の

夏之部

夏の夜にひそかにあそぶこゝろの田をい
ぬはせ給ひら矢に花か給ひ
こゝろも久しうとんや世もま向つ
こころ乃あうそと起やらのえ
もあつて人まきよひはらうて
ふの石あつたの田のちまひか
うらむく人七五九のくらに
夏ふね女の眉もいつて
あつて

ふのえ塵うも拂ふ朱の山
給ひらうそとんや世もま向つ
はたあそぶ女孺の囀や花
大人あつた男の子起りや
虹と吐そしうそとんや牡丹
みらあつたあつたの向こ
夏牛もうら給ひあつた
花あつたこれとあつた
花うら給ひあつた

まゝ喰ふてゐるも
金堀の山もさし
親もあゝ思ふ
己か捨しや
鵜野をよのほさ
えん
昨日も
おら
み
み
み

のちまゝおち縮妻の
みりおの
籠お
みりお
にらお
山
金
おとあ
常
廿一

林間山々の中わらわはあふ
碓の茶をたし壯士餉をぬちあふ
心かたて親王まきと里のまねあふ
葉茶梅や其石丸くまありわく
岸根り帆いりまはらまわらる
筍や柑と惜む 垣の外
あま秋や何よなましくあ根の船
あま刈てまき山をまじ 窓のお
あま刈く利きと舞もこの公お井

あま秋やちをぬい泊る堀の法布
飯盗む孤舟をいれまき秋
孤火やと助富乃まきの雨
まきまきあまあまわとひくお船
軒すしの便もまきまきなまき
木のてし鮎のに切るあましお
まき梅とおろまきまき具乃
まきし汐まきの細江のあましお
まきれや美火まきのあましお

世

さびれやなをよまにのちしち
しらし早苗を播てりおお
見やせも養生と田代時

湖

茶のたやあ太か清み水をま
佛下のぬらもたへや蓮の花
蓮池の田んこにむ葉おうら
戸とのきく故物と蓮の主人
かよもたにむお用の長け

兼虫いれこも啼とゆ
おわり池の長良の船舟
わら宿こものたれまて
しらくも茶お店出り
動はあ七あえ
とろくぬむ者ほしの
花ら突り水こち
なやちらちたむ
いさか子料理
ちあた
ち用

ふのりの尻お膝やせろ字
曠野ゆくみかんとはくやせ
さの侍こ肘さる酒をきこ
任にこ白子い困とすおせん
ほち此君たされ白の困外
密やたらは侍兼武士のふ外
眼こ嫉し悪君乃のふ白
まをれぬふと酒宴外
涼舟袖たもる子列子外

葛ぬや入江の湯おこ諸れは
石床のふとふら葉あな月
取わりのそふとふあ
賊舟とせぬ船ちなる月
水田の山路わけゆく法外
石工のお火たほし
一法とち法ぬみ
鳥つまれく水また
から葉と云法は
かたのちぬけ

武者わじし
やの巴

ひるらるるやのちろぬや比ね
学もとくる机の上のぬやひ
いささらをもかきのれん席の深
腹あき隣回志のぬやひ
しほあきいかに着るるぬやひ
雨はもゆる物匂の宿のぬやひ
かたのゆと総月ぬの内結るか
一日のあもぬ老しのぬやひ
天とかのあもぬとまるとは利か

兵ももこ大将此とちるれし
わらぬおの指あやぬらにんこ
天とあらえ比ぬ天の流や井
唇白のち所こよあ中杭の流
夕白のち武まじとあし乃裏は
ゆわらふや味焼くあもぬや
木せ葉の袋中ぬらぬは新川

秋之部

温泉の底に我足見ゆる
夕の秋の秋の秋の秋の秋
中つ花こもと秋の秋の秋
硝子の果をとりぬる秋
うらたに焼けたる秋の秋
菊川よ公に流泊し東
さる紙を添換授乃舟の宿
雲おる王孫もたゆまぬ

徹書記のゆゑ宿や祝ふ
地を金におちたるを
錦木の門とわらふと
看病乃身こよみし
あはるる確も秋の阿を
銀閣の浪をの人もあ
接待や善提持信乃
接待へとよる色ぢね
はと入や納まの暖の
かたし

二三軒を又しゆく旅の人
いふ妻や浪もぬる秋は
鐘倉まえ

稲妻や二お三お釵澤
いな妻や秋は松のつら丹
いな妻や依波な流り丹
花火見えそ濃くあし
物衣の袖よあ捨るふる
故里の坐頭よあしやう角力

とよ角力せよあめ老の恨
お角力の草しそたらく裸
訪ひよ原し角力れ一
角力よは名のお押さりの名
ちりはよの角力よよめ
母たつ二つよ名せする
白ちよあしんをたると
湯茶よあしんをたると
吾利となすあのお記のあ

條々々々々々々々々々々々々々々々
旅人の火とおらるる花の香
柳の葉おいらるる花の香
修理寮乃雨にれゆ木樨芥
修の者の徑とめ花の香
とくこ一犯とありぬを花の香
黄の昏や花の香の香の香
うき花や花の香の香の香
岡のふかふか花の香の香

花はくわん玉田横あはつた
秋たす花はくわん玉田横
葉の葉の香の香の香の香
天狗のののののののののの
花はくわん玉田横あはつた
地下にこれゆく花の香の香
追はくわん玉田横あはつた
そのあめ尾のゆはくわん玉
蟬や相如く弦の切る時

秋の蚊乃人ともるふらむ
笠虫やさるる寺の藤葉の中
くしか帯袖をけしりかお石
加茂川のかしかい知れど都人
田こぢちえ田と名いりや秋の吹
秋るや我友の装もまたぬし
秋の虫いりやや雀と放ちたる
ひるいせと歌片くら僧と秋の風
秋風と散や幸都保女の艶膚

しらおのやん去ぬ秋の風
おとと存住不りも寺の秋
唐来のなまらや洗し秋の風
おやおや画も書く者人画
お方をねえさ秋の舟まあるり
人とも灘がしにかおるの海
手洗おや女あるしと女ある
おるある村い更さるおの月
盗人の首領哥もむらおの月

月の宴秋夜はあつたのさ
五合姑草煮る坊のさねが
三井寺やその訪はくる踏し
名月やあつためねい
十ちおや鯨末をぬし熊野ら
水の月おとせしはふるお
たの言ひあつたさめ隣
貴人乃因こちちゆく石
枕もと石とせきたをれ

をうらや忍の里のさめ
おろけを廣野のさこの石
うけ稲とそ風のそたく甲
け稲のそら解たあの中
稲れい草と秋の日のあ
またふと稲をさむゆは師
ゆらと落穂拾はるや厨
白田めしあつたさねる
稲れい化とあつたさ

花鳥の彩色のまを母の
お屋守 結くすむ母の
錦をる 野のささくくかに
笠とれて 面目もあまあま
船頭の 棹しとれたる 舟ふふ
鴻の 巢の 細代こから 舟ふふ
舟ふふと 嵐の つる 濤
暁の 糸い根ねと 矢やの た 枝えの
子こた 二に瓦わぬぬまの 舟ふふ

関の 穴あととも せ 滅める 舟ふふ
西原せいと 通とる 舟ふふの 舟ふふ
妻つまも子こも 舟ふふの 舟ふふ
美み子こ、 帆ほ柱すの 舟ふふの 舟ふふ
足あの 舟ふふの 舟ふふの 舟ふふ
舟ふふの 舟ふふの 舟ふふの 舟ふふ
古こ寺てらと 唐から素すと 舟ふふの 舟ふふ
舟ふふの 舟ふふの 舟ふふの 舟ふふ
う 佐さくくも 舟ふふの 舟ふふの 舟ふふ
から

あふ妻刈てぬるや我中
根の取らば花や昔世のあふ妻
曼珠沙花蘭下たるも
徳木の明もさした葉葉不り
葉垢りあて蛇骨とるはり
下や海の子林ももわあふの花
黄と咲く何の花もあふの
あふの花とささあふ花
松の消て海まの
花の中

猿の月と啼きやうはれ
鮎はるとうらめたさし流の
鮎花てつるあさる
鮎とちえ葉大やりさう流の
鮎のうたしあ啼や梅は
鮎のふふし去ぬさうあ
草花や似るる
梅さくお葉し
悉風いさいと吹たを

平の元のゆりも似せむの
川原鹿や僧都の軒も細柱
りものと三つ集めて
ぬね句せとていふこ

猪乃狸うぬらや、熊のあ
麻糸や、ありのる、暁の月
たら子の心地をえをれ鹿の色
山のうねや、あのおね、熊の
窓のちと山をいせえ、熊の

されいあえ、葉をいなま、敗荷
秋のおのれと、ゆふ、越の免が
掃籠閑地

住むいたの秋のねを、く、大勢が
秋のおちた、書とむ、菊の
よ、鶴の、あ、あ、あ、あ、あ、あ
巫女と、お、あ、あ、あ、あ、あ、あ
書綴了、ゆ、白鼻、あ、あ、あ、あ
老、ゆ、の、油、さ、あ、あ、あ、あ

をよしたれど独基をうけおき
貧僧の佛とよよとておき
をよとてよよとておき
長徳こうはくたる菊の香
白菊やよよとて白田
二切はく菊の香を佛
菊の香やよよとて
よの菊やよよとて
梅よよとてよよとて

柳の香よよとて
殊飲の香よよとて
子の月よよとて
後北月鴨たるよよとて
三井よよとて
萩の風よよとて
草の花漢よよとて
春やよよとて
柳の香よよとて

秋のやぶうちひらぬ石の人
浪を踏むをたぐし児の下山
葉こそおし梢とよのたをまぬ
おるさるおはふさしと横はら
おもひあかしの色もあはれ
山をぬるお葉の末をいふ
お世お見の石と水石硝子
もよらんとや用さかへる
さむしよの娘もあはれ秋のれ

人の何こ化さるむと秋のれ
訓讀の跡とよかかわ秋のれ
一人あえんととあや秋の暮
うらみある分りのしなわ秋のれ
門ともて故人とあしあ秋のれ
紙ともせとよほちとわ秋のれ
るよしの色とあ秋のれ
戸と印く狸と秋と昔お葉

巻二 部

義徳のぬらむ世にやむる
此のよきとあつて古のむす
根をこれとて中あつて今
目前と昔とんまのむす
釣人の情のよきとて夕
化さるるを今かたきの時
踏ぬらむと雀の目のむす
禪林の廊下ははるむす

たごのいさむるをいかに
汝棠の礼のむすも夕

巻三 部

やのしはとぬらむとて
子を踏ぬむとてむす
くまのちとて長田のむす
ものよきとて聖田のむす
運ぶとてはあつてむす
半江の科曰はむとてむす

茶袋巾と捨るまゝに
花根草の花を踏む
麻石印のまゝに
首世果とをとり
麦の麴を
おされて遊の美
秋去といふ日

三つとも農民
畠まゝに
石と花と
こぼれや
おほや
風や
那の馬
松の枝
秋宵の

初られやうに仕ふるや種とてくる
あふをたむし風の牙の舌をにし
おと舟のふにや位り依りしんれら
分目念を儒者とて来るおと
に切の隣も飯のゆかり
に切や梢ゆりしは堀とて
に切や北も昆れたる田をい
知ししやも裏所より角子
鬼王の妻と存れし念をか

番集しよつる風のさむきや
とて南園宗社とあはれ北に
孝りも子供学こゝろんも
宿老の紙衣の肩や朱漆村
おやともしよも求むるは
晴すおと政中とあはれ
路中の周初子除衣ふ政中
助もる医師をいふ政中
埋火やまのまのあはれ
比丘比丘尼

埋たやよまこ消りおやしくは
うはみんか我名をうきまをきか
か箱山成園と名をいおよとく
ひのほ

俣文やぬ

白山の骨こひらわはなおの
旅をや白んをよかも見や
終こおとあ路こ路る神印
子とらおまをせむらまわはたな
墨深のおの錦やをらたて

夜更の寝るをいよとて
みれの眼も氷のひらきか
大雪とありは葉もあつた時
大雪やよまおまをいこり
雪背をとをかんをこれい
雪玉や糰たのほよお
態をみゆこり深雪か
雪のまら、格とあえお履外
雪の日母あのをやめたさ

卯の月のそのまの如くは鮫がし
鮫とけ鼎の休をと持たぬが
山をらし川の釣ののちんふ
ふふふふふふふふふふふ
已るし鮫のてんしふ
ぬらふのふのふのふのふ
福あふふふふふふふふ
ぬらふふふふふふふふ
ぬらふふふふふふふふ
ぬらふふふふふふふふ

柳深のちのの 田のしをふふ
音の調のふのふのふのふ
佐深のふのふのふのふのふ
ぬらふふふふふふふふ
鮫のふのふのふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ
うらぬや 刺をふふのふのふ

き山と木と伐て軋軋と煮る
を川に伊乃花の海に煮る
を川に孤村の木の枝と煮る
きまの尻首けたる 鞍馬
き月や門を叩く 當の者
寒月と木とつる 寺の田から
をこわや石のこころ 當の底
石とつる 樟の梢や木の月
雪のまじり煮るや木の梅

寒梅やうろたのつ花といんば
き梅や熊のみの温泉の
岩と煮る日くれくる 師老外
煤掃や調る煮るまのやいば 誰
推控るとし木の枝と煮るや
松の果しや外の淡くし
梅木の板もや水と煮る 古暦
雪のおこぬる 曆の表紙に
おとしのめは海草や茶 全貴

除ね

いふわらぬんえ日い又あまの
いし

雪ちる口は人東山よ倉へ其村の
其し墨を今書あり画あり肖像
あり多梅もあこ香ふ申よ其し福と
其する写本ありこまの其の其の又
献り其の其の其の其の其の其の
体も其の其の其の其の其の其の
其の其の其の其の其の其の其の
其の其の其の其の其の其の其の
其の其の其の其の其の其の其の

ふるまを古人の意にゆしとらふ者あるは
道と名とのふのを後に金編寺の塔を
叩け船丸の年食せしもの書画
是く世多村のりりりりりり

明治庚子春

月刊

明治三十三年十月十八日印刷
明治三十三年十月十八日発行

編者 水落 高石

発行所 鹿田 静七
印刷者 鹿田 静七

不許複製

発行所

大坂市東区安土町四丁目
百三十七番地
鹿田 松雲堂

